

## 海外での農産物販売の経済哲学

—村上春樹と神門善久の都市社会への態度を参考に—

長 谷 部 正\*

### 目 次

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. はじめに               | 4. 海外での農産物販売：他者となり物語る |
| 1) 海外販売に見いだす農経理論の新展開  | 5. 他者としてのコミュニケーション    |
| 2) 情報による需要創出が動因の現代    | 1) 技としての語ること          |
| 2. 曖昧化し内閉的なる私         | 2) ホスピタリティのもう一つの意味    |
| 3. 都市社会に対する態度         | 3) 物語り論的な分析枠組みの導入     |
| 1) 小説家村上春樹の場合：肯定性の態度  | —農経理論新展開の一方—          |
| 2) 農経学者神門善久の場合：否定性の態度 | 6. むすび                |

### 1. はじめに

#### 1) 海外販売に見いだす農経理論の新展開

本稿の目的は、農民による農産物の海外販売の問題の考察を通して、農業経済理論の新たな展開の可能性について経済哲学の観点から探ることである（以下必要に応じて農業経済を農経と略す）。

非常勤講師を依頼されて農業経済学の講義準備のため久々にいくつかのテキストを開いてみて、新古典派的な農業経済学が「生産優位」の思想に支えられていることに改めて気づいた。その中で版を重ねるテキスト（荏開津・鈴木，2016）の議論のベースは、依然としてかつて多くの農経学者が課題として、農民の「貧困からの脱却」のために取り組んだ経済発展（成長）論である。ここに農業・農村そして農民の直面する社会的矛盾に対して文芸評論家加藤典洋がいう「否定性」の態度（注1）をとり続ける専門家としての農経学者の姿が浮かびあがる。

本稿では、農経学者の代表として後述のように「小説や芸術の仕事」（神門，2012，234）を意識して執筆したという著書がある神門善久を取りあげる（注2）。農経学者とは対照的に消費や情報が経済の動因となっている現代社会に対して「肯定性」の態度を示しているのが、小説家村上春樹（注3）である。後で述べるが、社会学者見田宗介によれば、現代の先進諸国は資本の論理を極限的に追及した純粋資本主義と化した消費化社会であり、情報化社会であり、「生産優位」の思想だけでは把握しきれなくなっているという状況にある。「農民を貧困から救え」といったわかりやすく、説得的な説明が妥当しなくなった。農経は、かつてのような確固たる主張ができなく、その立場が曖昧化し、かつ、内閉的になっている（後述のように農民もまた同じような状況にある）。そこで、本稿では、消費にも着目し、小説家村上と農経学者神門の両者の都市社会への態度を対比的にとらえることから始めて海外農産物販売の問題に転じて、さ

---

\*アンランゲージスクール池袋校（東北大学名誉教授）

らに、今後の農業経済理論展開の一つの方向について考察する。

以下の本稿の進め方は次の通りである。この節の第2小節では、情報による需要創出が現代社会を牽引する源になっていることを社会学者見田宗介の考えに依りながら説明する。第2節では、現代社会においては、農民である私自体が一個のコピーと化し、その存在はきわめて曖昧化することについて述べる。本稿では、曖昧化し、かつ、内閉的である農民である私が、海外で農産物を販売する例を想定する。農産物の販売相手の現地住民にとって私は外国人であり、その地域の人でない点において私は他者である。なお、他者については哲学者ルートウィヒ・ウィトゲンシュタインの「見えとその見方」を意味するアスペクトの概念についての哲学者野矢茂樹の解釈を援用して「私とは異なるアスペクトを持つ者」と定義する。第3節では、第2次世界大戦後の日本社会は、経済の高度成長期を境として農村社会から都市社会へと変貌したので、これに対する態度について小説家村上春樹と農経学者神門善久とを対比して論ずる。第4節では、曖昧化し、内閉的な農民である私が海外で現地住民に農産物を販売することは、私が他者となり海外販売に至った経緯を物語りとして語る点について述べる。第5節では、第一に、物語りを「語る」ことは一つの技能なので、物語る「技」（わざ）の向上を技能の伝承を例として議論する。その際、物語りを聞く者は、物語りを語る私のからだの動きのリズムを、自分のからだで受けとめ（聞き）同調すること（＝同期）を通して、私物語りを理解し、受け入れることを論ずる。これと同様に、海外農産物販売において農民である私が語る際のからだの動きに現地住民は同期して理解して、受け入れる。第二に、現地住民による私物語りの受容を前提として、哲学者鷺田清一の議論に基づき第一義的には客のもてなしであるホスピタリティにはもう一つの隠された意味があることを説明する。これをもとに第三に、今後の農業経済学の理論的・実証的な展開の一方向として、物語り論的な分析枠組み（narrative approach）の導入の必要性を述べた上で、これまでの筆者の取り組みを概括的に述べる。最後の第6節で、全体を取りまとめる。

## 2) 情報による需要創出が動因の現代

本稿では、農民である私が海外において農作物を販売することを想定した議論を展開する。この海外で販売する農産物は食物であり、その需要（消費）をも考慮して論ずるには消費者（あるいはお客）の欲望についての検討が不可欠である。以下の議論では、共に desire の訳である欲望と渴望とを区別し、渴望は満たされずに渴く無限の欲望であると述べる哲学者エマニュエル・レヴィナスの発想をもとにして進める（レヴィナス, 2005）。

経済学者ジョン・ケネス・ガルブレイスは、このレヴィナスが述べる渴望を引き出す経済体制を表現した特異な学者である。なお、以下のガルブレイスについての記述には、伊東光晴、中村達也、根井雅弘の著書を参考にした（伊東, 2016）（中村達, 1988）（根井, 1995）。

第2次世界大戦後の技術革新がもたらした経済発展は、欧米諸国や日本を「ゆたかな社会」（ガルブレイス, 2006）へと変貌させた。供給不足から供給過剰な経済への転換である。供給過剰がもたらす恐慌を回避するための対策として需要開発（あるいは需要創出）が重要な課題となった。

ガルブレイスは、新古典派的な消費者主権に対して企業の広告・宣伝による需要開発を示す「依存効果」こそ重要であると述べた（ガルブレイス、2006）。彼は、企業が消費者の欲望を制御している現状を強調する。なお、ガルブレイスは、カリフォルニア大学バークレー校で経済学を学び、同大デービス校講師として農業経済学分野に関する研究から経済学者の道を歩み出した。また、同氏は、新古典派とは異なる制度学派に連なる主張を持っていたにもかかわらずアメリカ経済学会長を務めている。

さて、社会学者見田宗介は、従来のような資本による労働主体の管理に着目するのみならず、欲望主体の管理の重要性に焦点をあて、自動車会社のジェネラルモーターズ（GM）に代表されるデザインと広告とクレジットカードを活用した「情報による需要創出」が、いわば「純粋資本主義」を成立させたと主張する。この純粋資本主義において「資本システムの論理自体の、消費領域への貫徹であり一般化」（見田、1996、30）がみられる、と論じている。見田は、消費概念を従来の〈商品の購買による消費〉に対置させ現代の消費を〈充溢し燃焼しきる消尽〉であるとして、前者を「消費」、後者を〈消費〉と表す（見田、1996）。また、情報機器が高度に発達し、消費者の飽くなき欲望をデザインと広告によって引き出し、需要創出するという新たな時代の情報の役割を〈情報化〉と表す。そして、純粋資本主義の体制下の現代社会を従来とは情報や消費の持つ意味が異なり、それぞれ〈情報化〉と〈消費〉と明示的に表し、そのような社会を〈情報化／消費化社会〉と表現する。この社会における欲望は、「他人の欲望」を欲望するという点に特徴がある。

## 2. 曖昧化し内閉的なる私

前節で述べたように、見田宗介は情報を活用した需要創出が現代社会の動因であることを指摘しているが、同時に、〈情報化〉は世界のヴァーチャル化や人格の多重化の現象を産みだしている。そのため、精神と身体とが一体とみなされていた近代と異なり、現代では精神と身体とが分離し現実界と他界（あるいは異界）（注4）との往来という発想が近代以前のように再び受容され、物語り（注5）が重要な役割を担うに至った。ここに村上春樹の物語的文学が支持される基盤がある。なお、物語りとの関連で、私は「私物語りを語る者」とであるという規定が本稿の基本的な立場である。

また、見田が述べるように情報化社会は精神と身体との分離を生み出すとともに、社会にコピー文化を蔓延させ私自身もコピーのような存在となり、「私は私か？」という問いを産みだすをえないほど私が曖昧化している。また、著者が論じたこともあるが、現代社会において人々は互いに分かり合えると感じる小さな集団で互いの物語りを語り合うというように内閉的な態度になりがちである（長谷部、2008）。

曖昧化する私を論じる上で、私とは異なる存在である他者の問題、換言すれば、私と他者の関係をおさえる必要がある。また、4節以降で述べるように海外での農産物販売において他者である現地住民の客へと異他化することが、ホスピタリティの発想を持つことにつながる。このように本稿において他者は重要な概念である。

他者に関しては、哲学者野矢茂樹による哲学者ルートヴィッヒ・ウィトゲンシュタインのア

スペクト論の解釈（注6）に基づく「他者は私とは異なるアスペクトを持つ者である」という定義が参考になる。アスペクトとは、あるものの見えを示すだけでなく、あるものをどのようにとらえる（意味づける）かという見方をも示す概念である。例えば、ウサギにもアヒルにも見ることができるジャストロー図形で、最初ウサギが見えていた状態（あるアスペクト）から、気づくとアヒルに見える状態（他のアスペクト）へ変わるということはアスペクト転換と呼ばれている。本稿で議論している物語りもまたアスペクトである。本節の最初で私を「私物語りを語る者」と規定しているので、他者には「私とは異なる物語りを語る者」とも定義しうる。

### 3. 都市社会に対する態度

#### 1) 小説家村上春樹の場合：肯定性の態度

拙論でも述べたように日本社会は、第2次世界大戦後の経済の高度成長期を境として農村社会から都市社会へと変貌し、日本国中どこもかしこもふるさと（故郷）あるいは郊外となった（総ふるさと化あるいは総郊外化）（長谷部，2014）。これは、見方を変えれば、明治以降の目標であった近代化の達成という出来事である。この総ふるさと化あるいは総郊外化の過程で、近代の特徴である合理性（効率性）の精神が浸透し、日常生活では食品などの商品選択において利便性を求めるようになり、それが郊外の道路沿いにロードサイド型店舗が立ち並ぶ風景を全国各地に産みだし、風景の画一化を招いた。これを社会学者三浦展は「ファスト風土」と命名し、注目を集めた（三浦展，2007）。

このような社会の変化をふまえて文芸評論家川本三郎は、「都市の感受性」のキーワードで村上春樹や村上龍の小説を解釈している。それによれば彼らの小説はポップス風な都会小説であり、その中では「都市が提供する「気分のいい」消費生活を楽しむ」（川本（2006）67）物語りが語られている。換言するなら、彼らが、それまでの貧困な時代における世の中の諸矛盾に対する「否定性」の態度から豊かな都市社会になった世の中に対する「肯定性」の態度への変更を淡々と語る文体を見出した（加藤，2015），（村上，2016）。言い方を換えれば、総ふるさと化（あるいは総郊外化）した社会の表現にふさわしい文体の発見である。

既述のように近代化が達成される一方で、ファスト風土といわれる風景が画一化した中で私の曖昧化という事態に陥っている。これをとらえて文芸評論家三浦雅士は、現代において人々が「自己が自己であることを実感できないという病」（三浦雅，1982，200）にかかっていると述べている。このいわば時代の病と向き合っ村上春樹の初期作品では、曖昧化して内閉がちな私（主人公）が描かれている。処女作『風の歌を聴け』（1979年6月発表）では、主人公が自閉症で14歳の春まで自分のことを人に話せなかった体験を持つ。

#### 2) 農経学者神門善久の場合：否定性の態度

次に都市社会への転換に対する農経学者の対応をみってみる。新古典派的な農業経済学の現状は、一方で、従来からの農産物生産の増大や生産性の向上によって経済へ貢献するという「生産優位」の議論がある（荏開津・鈴木，2016）。中心的な論点は、1節でも述べたようにかつて多くの農経学者が取り組んだ農民の「貧困からの脱却」のための経済発展（成長）論の展開であり、その開発途上国への適用である（典型的なのは大川一司の研究グループに代表された農業の成長分析（大川編，1963））。

一方、経済の高度成長にともなって「ゆたかな社会」（ガルブレイス，2006）が到来し、日本でも供給過剰を回避するために需要創出が課題となった。この過程で、農業や農村も大きく変貌した。この時代の急速な近代化は、農業での機械化・化学化を進展させ、同時に、技術の平準化をもたらした。また、機械化にともない農業労働には余剰部分が生み出され、機械投

資の資金獲得の目的もあり、農民の非農業への就業（兼業化）が進んだ。機械化・化学化による技術の平準化や兼業化は、農業・農村における共同作業を減少させ、農作業の個別化をもたらした。これは、農民である私に即せば、社会全般にみられる私の曖昧化（同時に内閉）の現象に繋がる。また、機械による農作業を容易にするために圃場区画等整備の補助事業が展開され、画一化された圃場の眺めとしての景観が生み出された。これはファスト風土の農村版といってもよい（注7）。この背景には、農村社会においても農作業の個別化等によって曖昧化し内閉的な私がいることがある。

この時期には、生産優位の見直しの機運が起こると同時に、農業経済学分野においては「フードシステムの経済学」の台頭がある（時子山・荏開津・中嶋，2015）。これは食品需要、食品工業とその組織、流通等の分析を主としている。時子山らは、需要関数の計測による需要の価格・所得弾力性の推定結果をもとに食品需要は所得や価格などの経済的要因による影響が小さくなったと結論づけ、代わりに人々の「生き方や考え方のなどの各人の好みの違い」（時子山・荏開津・中嶋，2015，29）である社会的・文化的要因の影響が大きくなってきたと推論している。

しかし、趨勢的なコメ消費の減少傾向に対応して1980年代に本格化した稲作の生産調整政策に直面したこともあり、農業経済学界全体として生産優位の発想から抜けきれなかった。このことに端的に示されるように農経学者は、農業・農村・農民の直面する社会的矛盾に対して「否定性」の態度をとり続けている（注8）。

ここで、『日本農業への正しい絶望法』を表した農経学者神門善久に触れたい。神門によると、この本の性格を「人間社会の愚かさに詠嘆する」（神門，2012，233）としている。新古典派経済学的精神の日本農経学界における代表者の一人の神門は、この点について「小説や芸術の仕事」（神門，2012，234）として意識しながら執筆したものである。神門の一番の主張は、技能集約型が日本農業のメリットだったが、これが枯渇の危機に瀕していると述べている点にあると思われる。端的には、農業技術の「マニュアル化」が技能枯渇を招く一因と主張している。生物成長の歴史に規定される農業生産の特殊な知識である現場の技能を組織化することは難しい反面、一方で現代の科学技術一般という面からみた場合には農業技術の平準化は避けがたく、それゆえ神門が強調する農業技術の「マニュアル化」にも繋がるといえる（注9）。

詠嘆というより技能枯渇の現状への憤りを露わにする神門の議論は、「生産優位」の発想を持ち、かつ、「否定性」の態度をとり続ける農経学者のそれと同列である。著者の願望を付け加えるなら、今や農経に敵なしの神門氏に期待したいことは、テンポのよい農業経済「評論」を書く評論家としてふるまう場合における都市社会への「肯定性」の態度についての理解である。なお、技術と区別した技能についての考察は経済学者斎藤修の研究に負っているとのことだが、技術哲学の基礎ともいえるハイデガーなどの議論を加味した評論となっていないことが惜しまれる。

#### 4. 海外での農産物販売：他者となり物語る

本稿では、野矢茂樹のアスペクト論解釈に基づき私を「私物語りを語る者」とであると定義した。これに関し私について独自の考察をおこなっている哲学者上田閑照の議論を参考に他者との関係における私のあり方に説明を加えたい。

上田は、「私は私である」という際の「私は」と言った後の一瞬の切れ目あるいは間（ま）に注目する。「私は」の後の一瞬の間は、「私は」と言った後でこの「私」は本当に私なのだろうか、という反省（自省）があるとみる。それゆえに「私は私である」の「私は」の後に、一呼吸による切れ目あるいは間を置くことは、私の外から私ならざる者として、つまり他者として（他化して）みることに他ならない。この他者となつての私自身の反省を考慮すれば、「私は私

である」は、実は「私は、私ならずして、私である」（上田，2009，7）と言うべきである。

上田の議論と既述の「私は、私物語りを語る者」という定義とを組み合わせることにより、「私は、私物語りを語る、私である」と表すことができる。この「私物語りを語る」時は、「私ならずして」という形で他者として語る（＝外に開く）と解釈できる。

ここで、海外での農産物販売を例として考えてみる。海外での農産物販売は、私が生活している場所の食文化と異なる地での取引であるだけに、ものを売るに際して私が海外で販売するに至った経緯や思いをわかってもらおうとして現地住民にその物語り（私物語り）を語る。海外の現地住民からみれば、私は外国人（＝他者）である。外国人（＝他者）として私物語りを語りつつ、作った農産物やその加工品を販売して売れることは、同時に、ファスト風土化の中で曖昧化し内閉的な私が海外で（他者である）現地住民と対面して私を外へ開き、私物語りが現地住民に受け入れられることに繋がる。

## 5. 他者としてのコミュニケーション

### 1) 技としての語ること

前節では、海外での農産物販売において他者として物語るにより私を外に開くと述べた。しかし、物語りは、語ればそれでよいというわけではない。「語る」ことは一つの技能であり、それゆえ物語りとしてよくわかり、聞き手に納得してもらえるように語るためには、語りの「技」（わざ）をみがくことが必要となる。

次に、技をみがくことについて師匠が演ずる芸を弟子である私が稽古を通して学ぶとの想定で検討してみよう。

本稿では、芸を「からだで語る」という意味で身体言語をも伴う行為とみなす。稽古の場において「言葉で語る」私と演ずることによって「からだで語る」私という二面性を持つ。後者の私を「影」と表す。また、上田閑照によれば、前者の言葉で語る私にも二面性がある。上田の議論をまとめれば、内に閉じられる私を「自我」、外に開く私を「自己」と規定する（上田，2009）。本稿では、上田の考察に加えて、自己は自我と影とを結びつけて外へ開かせる役割をもつとみなす。

芸のような「行為」の創造性を検討する場合には、哲学者西田幾多郎の「行為的直観」概念の導入が有効である。行為的直観は、身体を通して主体と客体との合一がはかられる点に特徴がある（注 10）。主体が客体に働きかける行為がうまく達成される段階にいたると、感性的直観より高次の「知的直観」（西田，2004）が働くようになり、客体との一体化がはかられ、創造性が発揮されるようになる。知的直観は、本稿で定義したからだで語る影と言葉で語る自我とが自己によって結びつけられたときに発揮されると考えられる。

ここでの考察にとって廣松渉の「共振的同調」の考え方が参考になる（廣松，1996）。これによれば、弟子である私は、師匠のからだの動きをからだで受けとめ（聞き）、つまり私のからだが作るリズムに同調すること（＝同期）を通して芸を体得すると説明できる（注 11）。こうした芸の体得は、上記の西田哲学における行為的直観の創造的側面としての知的直観によるものといえる。この時、師匠が言語によって作った芸の世界と身体の動きにより形成された芸の世界とが一体となり、同時に弟子である私の共感も得て、小宇宙（ミクロコスモス）が創造される。弟子である私も、芸を体得し、さらに稽古を続けて上達すると、演ずることにより小宇宙を形

成することが可能になってくる。

上記の議論における「芸」を「物語りを語る技」と読み替え、私はその語り方を師と仰ぐ先輩農民から学びつつ、その技を体得する場合を想定すれば、本稿の関心である海外での農産物販売において私が私物語りを語るための語りの技をみがくことも、同様に論ずることができる。私は物語る先輩農民の物語りそのものだけでなく、物語る先輩農民のからだの動きをからだで受けとめ（聞き）、さらに物語る時の先輩のからだが発するリズムに同調すること（＝同期）を通して、語りの技を取得する。

からだの同調による語りの技の習得という議論のポイントを理解すれば、私がある国を訪れて農産物を売る時に私の語る物語りが現地住民に受け入れられる場合にも、からだの同調による私物語りの理解という類似のことが起っていると考えられる。つまり、現地住民は、物語りを語る私のからだの動きを、自分のからだで受けとめ、さらに私のからだに生ずるリズムに同調すること（＝同期）を通し、私物語りをからだ全体で理解し、受けとめる。

## 2) ホスピタリティのもう一つの意味

前項のような現地住民による私物語りの受容過程の理解が妥当であるとすれば、次の鷺田清一による、通常は客のもてなしのみ理解されているホスピタリティ概念の隠されたもう一つの意味を検討することにより、新たな農経理論展開への道筋が見えてくる。

鷺田は、ホスピタリティを次のように説明する。

「ホスピタリティとは、〈客〉を迎え入れる者をその同一性から逸脱させるものであった。〈客〉をではない、あくまで〈客〉を迎え入れる者を、である。〈客〉を迎え入れるというのは、〈客〉をおのれに同化することではなく、逆におのれ自身をよそよそしいものへと異他化することである。」（鷺田，2015，229）

鷺田の説明にしたがえば、海外農産物販売で自らを外に開くことは、同時に、私ではなく、私を離れて客である現地住民へと異他化することがホスピタリティの発想（歓待の思想（注12））への転換をもたらすのである。

この鷺田の議論は、哲学者港道隆がレヴィナス他者論の解釈において、他者を受け入れることが「歓待の思想」であると述べていること（港道，1997）をふまえている。レヴィナス流に私が他者に対して無限責任を負うという倫理の議論には、港道によれば他者が傷ついたことに傷つくというレヴィナス哲学の基本的性格である「歓待の思想」を、さらに基礎づける「傷つきやすさ」としても現れるパトス性（受動性，受苦性）が根本にある（注13）。鷺田や港道の議論をふまえるなら、傷つきやすく、弱い者でもある他者に責任を負う私のあり方を問うことが倫理の基本発想にあり、ホスピタリティにはそのような意味もあるといえる。

加藤典洋がここで述べたことに関連する村上春樹の記述を『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（2013年4月発表）から引いている（加藤，2015）（注14）。

高校時代に親密に付き合い合っていたメンバー全員に突然忌避されるなどの多くの難問の原因が、自らの「欲望の自制」（内田，2014，30）や真に傷つくことを避けてきた自分の行動にあることを主人公である多崎つくるとは知る。かつての親友達を訪ね歩く旅の最後にフィンランドにいるエリを訪れた時の主人公の表白が次である。

「そのとき彼はようやくすべてを受け入れることができた。魂のいちばん底の部分で多崎つ

くるは理解した。人の心と人の心は調和だけで結びついているのではない。それはむしろ傷と傷によって深く結びついているのだ。痛みと痛みによって、脆<sup>もろ</sup>さと脆<sup>もろ</sup>さによって繋がっているのだ。(略)」(村上, 2015, 350)。

これはレヴィナス哲学における倫理の根底を貫く「傷つきやすさ」の表現ととらえることができる。村上春樹が文学者であるゆえにかくなる表現が可能なのだとして退けるのではなく、経済学とこのようなレヴィナス流の倫理とを結びつける方法としての「物語り論的な分析枠組み (narrative approach)」を取り入れることにより、かくなる問題をも考察し、かつ、表現することができる。したがって、この物語り論的な分析枠組み (narrative approach) の農経分野への導入は、今後の農経理論の発展的展開にとって有益と考えられる。次に、この点について簡単に述べる。

### 3) 物語り論的な分析枠組み (narrative approach) の導入 — 農経理論新展開の一方向 —

これまでの議論により、農業経済学の新たな展開にとって「私とは異なる物語りを語る者である」他者を視野に入れた理論や方法論を迫及することが重要な研究テーマと考えられる。そのための一つの可能性として物語り論的な分析枠組み (narrative approach) の導入がありうることを論じた。そこで、この分析枠組みで筆者が試みたこれまでの研究を一例として概括すれば、次の通りである。

#### (1) 物語り論

野家啓一は、物語りを過去の出来事を想起して語るものとしている。強引な後づけの理由であるが、水田の圃場整備事業推進に対する農民の同意のプロセスを筆者が分析した宮城県豊里町の事例 (長谷部, 1990) など、物語り的な発想による一つの分析と見なすことができる。

また、経済学と関連でいえば、物語りとして規範化された風景は公共財として取り扱えることを意味する。拙論で、物語り化した農村風景を公共財とみなすと、マルクス経済学者宇野弘蔵によるマルクス資本論の単純な価値形態の議論と類比的に扱うことができることを説明した (Hasebe, 2015)。

#### (2) 風景物語り

筆者は、野家啓一の物語り論 (野家, 2005) をもとに風景物語りを提案した (長谷部, 2005)。風景物語りの特徴は、西田幾多郎の環境論を風景論として読み替え、野家の物語り論と結びつけた点である。この分析枠組が風景評価にも適用できることを理論的に説明している (長谷部・木谷・野村, 2003)。それ以前の分析結果である農村風景評価の日韓比較については、これにより解釈可能である (長谷部・木谷・野村, 2002)。さらに、筆者は風景物語りの分析枠組みを適用して、個別事例分析として山形県金山町の「街並み風景形成」について担当職員の身体性確保ということに焦点をあてた解釈を試みた (長谷部, 2007)。

#### (3) 拡張版風景物語り論

筆者は、身体の言語行為 (身体言語と表記) をも考慮した拡張版物語り論を提案し、説明した (野家の物語りと区別するため〈物語り〉と表記) (長谷部, 2009)。この拡張版物語



り論を用いて、山形県鶴岡市黒川地区の祭りの存続、及び祭りで舞われる能の芸やその際ふるまわれる郷土食の継承についての解釈を行った（長谷部，2009）。

（1）から（3）の例は、筆者が試みた物語り論的な分析枠組み（narrative approach）に立脚した理論的・実証的な研究である。

## 6. むすび

本稿では、次の点を論じた。

第1に、農民である私が海外で私物語りを語りつつ農産物販売することは、現地住民に他者（外国人）として自らを開き、曖昧化し内閉的な私自身を外に開く行為である。

第2に、農産物販売する私の物語りを聞く現地住民は、私の手ぶりや身振りなどの動きをからだで受けとめ、さらに同調すること（＝同期）によってこの私物語りを理解し、受け入れる。

第3に、海外農産物販売において内閉から脱して外に開くことは、他者を受け入れるだけでなく、私の農産物を購入するお客である現地住民へと異他化することもまたホスピタリティであるという発想へと繋がることを論じた。なお、ホスピタリティには、客を迎え入れてもてなすという通常の意味だけでなく、傷つきやすく、弱い者である人間のあり方を追求する倫理的な意味合いもある。この点についての考察は、別稿に譲ることにしたい。

本稿をまとめれば、海外での農産物販売において、私が私物語りを語りつつ自らを外に開くと同時に、お客である現地住民に異他化することであるホスピタリティの発想（歓待の思想）を持つという議論は、明治以降の目標であった都市社会の到来にもかかわらず、それに対して何故か頑なともいえるほど否定性の態度をとり続けている農業経済学が「私とは異なるアスペクトを持つ者である」（野矢茂樹）他者を組み込んだ場面を取り扱うことができる余地があること示唆するものであると理解できる。その一例として、筆者による物語り論的な分析枠組み（narrative approach）による理論的かつ実証的な研究について概説した。こうした試みを継続することで、農業経済学の新たな理論の確立とその実証方法の開拓が進むことを期待したい。

注1) 加藤は「否定性」を次のように説明する。「それは、国家なるものを否定すること、富者なるものを否定すること、現在の社会を構成している理不尽なるものを否定すること、世の中の不合理を正当化する権威と権力とを否定することであり、つまりはこの否定性が、身分制を倒し、近代社会を実現し、これをより民主的な社会へと推進させてきた。近代の動きの原動力にほかならない。」（加藤，2015）

2) 神門の新書の他にも、同じ頃に書かれた新書として生源寺眞一、本間正義のものがある（生源寺，2011）、（本間，2014）。しかし、共に優れた農政批判の書である両著に対して、神門の新書では本文で後述するように「人間の愚かさを詠嘆する」（神門，2012，233）とはっきり表明し、かつ、これは「小説や芸術の仕事」（神門，2012，234）と述べている。この一点からして、農業経済学の枠組みの拡張を意図している本稿で取り上げるのに、生源寺や本間の新書よりもふさわしいと判断した。また、著者が古本屋で入手した神門の新書は、出版開始から50日程度で6刷なので、農業経済学の著書としては広く巷間で注目を浴びたと言える。村上春樹の小説と比較するのに相対的によりふさわしいことも選定の理由である。なお、生源寺の新書は2018年1月現在で14刷とロングランの売り上げ実績となっている。

3) 村上春樹は日本の小説家で、1949年1月に京都市に生まれる。早稲田大学第一文学部在学中にジャズ喫茶を経営する。1979年に『風の歌を聴け』で群像新人文学賞を受賞し、1987年発表の『ノルウェーの森』は発行部数1000万部を超えるベストセラーとなる。村上作品は多くの国の言葉に翻訳をされ、世界的にも注目を浴びている。

4) 他界は死者たちの世界で、異界はカミ(神)や幽霊等の世界である。後者は、古くから物語りの中で語られ

てきた世界である。

- 5) 哲学者野家啓一によれば、物語りは過去の出来事の想起によって作られる(野家, 2005)。物語りの核をなす物語文は、「はじめ」と「終わり」をつなぎ、経験を時間系列的に構造化する(ダント, 2000)。なお、野家は単なるファクトと見なされる物語(story)と区別して共同的な言語行為として生み出されるものを物語り(narrative)と表現している。拙論も併せて参照されたい(長谷部, 2005)。
- 6) この点については野矢の著書を参考にした(野矢, 2010), (野矢, 2012)。また、ヴィトゲンシュタインの著書も参照のこと(ヴィトゲンシュタイン, 1995)。
- 7) ワシントンのアメリカ農商務省で米国人研究者が日本の大型区画に整備された水田風景について“boring”と評したことを思い出す。
- 8) 補足として、仮に農経学者が「肯定性」の態度をとるとはどのようなことかについて述べる。「ゆたかな社会」になって生産面での近代化だけでなく、多くの農家も「貧困から脱却」して生活を楽しめるようになった。この生活を楽しむ農家像を描き、同時に彼らの農業生産の効率を高める方策を探るといった発想の研究は、「肯定性」の態度といえよう。
- 9) 工業と比較した農業技術の特徴とその哲学的考察については、拙論(長谷部, 2015)を参照のこと。
- 10) 行為的直観については、西田の論文を参照のこと(上田編, 2000)。
- 11) 同期については、蔵本由紀による説明が参考になる(蔵本, 2007)。
- 12) 北欧神話研究者八木茂樹は、語源研究を参照して、歓待(ホスピタリティ)について「「敵対者でもありうる、異人を受け入れ、主客の区別が無効になる」といった意味合い」(八木, 2007, 117)と表現している。
- 13) 鷺田のパスに関する議論は、哲学者中村雄二郎のパスの知の議論(中村雄, 1990)をも参照している。
- 14) 加藤は、この小説を2011年3月11日に発生した「東日本大震災と原発事故とそこからの回復という物語の代わりに、多崎つくるという主人公に起こる、理由のあかされない友人たちとの共同体からの突然の排除と絶望、そしてそこからの回復の試みという試練」(加藤, 2015, 243)を表現したもので、とまとめている。そのうえで、多崎つくるがフィンランドからの帰国後ガールフレンドにそれまで避けてきた愛の告白をすることは彼が抱えていた「小さな主題」の克服といえるものの、震災や原発事故後の共同体の再生という日本社会の「大きな主題」にはコミットしてないことが村上春樹に依然として残された課題であることを指摘している。

## 引用文献

- ダント, A. C. (2000) 『物語としての歴史—歴史の分析哲学』(河本英夫訳)国文社。
- 荏開津典生・鈴木宣弘(2016) 『農業経済学 第4版』岩波書店。
- ガルブレイス, J(2006) 『ゆたかな社会 決定版 現代岩波文庫』(鈴木哲太郎訳)岩波書店。
- 神門善久(2012) 『日本農業への正しい絶望法 新潮新書』新潮社。
- 長谷部正(1990) 「圃場整備同意率に影響を及ぼす経済的要因の計量分析」『農業経済研究』, 第62巻第1号, 12-21。
- 長谷部正(2005) 「風景「物語り」を語ることの意義」『感性哲学』, No. 5, 79-94。
- 長谷部正(2007) 「行為的直観による街並み風景形成の解釈—役場職員にみる身体性確保と「物語り」共有の工夫—」『農業経済研究』, 第78巻第4号, 163-173。
- 長谷部正(2008) 「郊外の風景とジャスコ化する身体」『感性哲学』, No. 8, 97-113
- 長谷部正(2009) 「農村の祭りにおける芸能と食の伝承—拡張版物語り論の適用可能性—」『2009年度日本農業経済学会論文集』, 346-353。
- 長谷部正(2014) 「総ふるさと化の意味すること—小林秀雄「故郷を失った文学」の現代的意義—」東北大学大学院農学研究科『農業経済研究報告』, 第45号, 16-27。
- 長谷部正(2015) 「技術の視点からみた農業と工業の類似と差異」『農業と経済』, 第81巻第3号, 46-54。
- 長谷部正, 木谷忍, 野村希晶(2002) 「農村風景の評価と条件不利地への直接支払い意識—日韓比較—」『2002年度農業経済学会論文集』, 166-169。

## 海外での農産物販売の経済哲学

- 長谷部正・木谷忍・野村希晶 (2003) 「物語りとしての農村風景とその評価」『2003 年度日本農業経済学会論文集』, 75-78.
- T. Hasebe (2015), “Fukey (Scenery Narrative): Integrating Ethics and Economics”, オハイオ州立大学東南アジア研究センター日本研究所講義 (IJS Lecture, 15/9/2015) 用論文 (未公開).
- T. Hasebe, M. Ohmura, H. Bannai (2010), “Rural Scenery Narrative and Field Experiences: From an Aspect of Kansei,” in Dai, Y., Chakraborty, B. and Shi, M. (Eds.), *Kansei Engineering and Soft Computing: Theory and Practice, Engineering Science Reference*, PA, USA, 255-265.
- 廣松渉 (1996) 「役割論の再構築のためにー表情現相・対人応答役割行動ー」(廣松渉『廣松渉著作集 第五巻』岩波書店), 55-72.
- 本間正義 (2014) 『農業問題：T P P 後、農政はこう変わる ちくま新書』筑摩書房.
- 伊東光晴 (2016) 『ガルブレイス：アメリカ資本主義との格闘 岩波新書』岩波書店.
- 加藤典洋 (2006) 『村上春樹 イエローページ1, 2 幻冬舎文庫』幻冬舎.
- 加藤典洋 (2015) 『村上春樹は、むずかしい 岩波新書』岩波書店.
- 川本三郎 (2006) 『村上春樹論集成』若草書房.
- 蔵本由紀 (2007) 『非線形科学 集英社新書』集英社.
- レヴィナス, E. (2005) 『全体性と無限 (上) 岩波文庫』(熊野純彦訳) 岩波書店.
- 港道隆 (1997) 『レヴィナスー法 - 外な思想』講談社.
- 見田宗介 (1996) 『現代社会の理論 岩波新書』岩波書店.
- 三浦展 (2007) 『ファスト風土化する日本 郊外化とその病理 新書 y』洋泉社.
- 三浦雅士 (1982) 『主体の変容』中央公論社.
- 三浦雅士 (2005) 『考える身体』NTT 出版.
- 村上春樹 (1979) 『風の歌を聴け』講談社.
- 村上春樹 (2015) 『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年 文春文庫』文藝春秋社.
- 村上春樹 (2016) 『職業としての小説家 新潮文庫』新潮社.
- 中村達也 (1988) 『ガルブレイスを読む 岩波セミナーブックス』岩波書店.
- 中村雄二郎 (1990) 『魔女ランダ考ー演劇知とはなにか ー同時代ライブラリー』岩波書店.
- 根井雅弘 (1995) 『ガルブレイス 制度的真実への挑戦 丸善ライブラリー』丸善株式会社.
- 西田幾多郎 (2004) 『善の研究 岩波文庫』岩波書店.
- 野家啓一 (2005) 『物語の哲学 岩波現代文庫』岩波書店.
- 野矢茂樹 (2010) 『哲学・航海日誌 I 中公文庫』中央公論新社.
- 野矢茂樹 (2012) 『心と他者 中公文庫』中央公論新社.
- 大川一司編 (1963) 『日本農業の成長分析』大明堂.
- 生源寺眞一 (2011) 『日本農業の真実 ちくま新書』筑摩書房.
- 時子山ひろみ・荏開津典生・中嶋康博 (2015) 『フードシステムの経済学 第5版』医歯薬出版.
- 内田樹 (2014) 『もういちど村上春樹にご用心 文春文庫』文藝春秋.
- 上田閑照 (2009) 『私とは何か 岩波新書』岩波書店.

## 長 谷 部

上田閑照編 (2000) 『西田幾多郎哲学論集Ⅱ 岩波文庫』岩波書店.

鷲田清一 (2015) 『「聴く」ことゝの力 臨床哲学試論 ちくま文庫』筑摩書房.

ウィトゲンシュタイン, L. (1995) 『ウィトゲンシュタイン『哲学的探求』第Ⅱ部読解』(黒崎宏訳・解説) 産業図書.

八木茂樹 (2007) 『「歓待」の精神史—北欧神話からフーコー, レヴィナスの彼方へ— 講談社選書メチエ』講談社.

付記: 本稿に先立つドラフトについて, 下記の学会, 研究会で報告, および川越 style 倶楽部で講演した.

2016年9月 第1回武蔵野研究会 (女子栄養大学, 埼玉県坂戸市)

132回北海道農業経済学会例会 (とちかちプラザ, 北海道帯広市)

10月 実践総合農学会第11回地方大会 (長野県長和町)

12月 川越 style 倶楽部講演 (埼玉県川越市)

2017年4月 2017年度日本農業経済学会 (千葉大学園芸学部, 千葉県松戸市)

それぞれの会場においてコメントを頂いた方々に深く感謝いたします.